

♪「Duo QuenArpa」第13回南風コンサート おらり訪問記♪

【6月6日(水) 14:00開演】会場の横浜市鶴見区民文化センター サルビアホールは、JR 京浜東北線「鶴見」駅から徒歩2分、100席のこじんまりとした音楽ホールで、音響がとても良い綺麗な会場でした。

プログラムは、途中休憩を挟んでの2部構成。(以降の文中※印はプログラムより一部を転記)

最初の曲は「埴生の宿」、続いて「アマポーラ(ひなげし)」、「さとうきび畑」、「芭蕉布」、「森深く静かで平和な島」(※デンマーク本土ユトランド半島の東にあるロラン島の民謡。)、 「黄色い村の門」(※この歌の歌い手はおじいさんで、昔は村から村へ行商する流れ者か。“黄色い村”で女にほれ込み、黄昏に村の出口で待ち合わせ、駆け落ちして失敗し妖精の丘に迷い込んだことを懐かしんで歌う)、1部の最後は、「広い河の岸辺」(スコットランド民謡、訳詞：八木倫明/♪河は広く 渡れない ♪飛んで行く 翼もない ♪もしも小船があるならば ♪漕ぎ出そう ふたりで「1番のみ転記」)。

第1部の演奏曲と曲の紹介をしました。演奏者は、“やぎりん”こと八木倫明氏(ケーナ、ナイ&作詞)と池山由香氏(アルパ&ボーカル)で、「デュオ・ケーナルパ」の名称で活動されています。

お二人の演奏を聴くのは初めてです。第2部の中で民族楽器の紹介がありました。小型のハープのような楽器は「アルパ」といい、スペイン語でハープのことだそうです。真っ直ぐ立てると奏者が立ったとき丁度目の高さぐらいでした。重量は10キロ位と話していたので私達が使っている中型のアコーディオンぐらいでしょうか。それをイスに座って右肩で抱き支えるようにして弾きます。弦は37本で「ファ(F)」の音を根音にした「へ長調」に調律されているとのこと。 “ケーナ”の紹介では、長さの違う二つのケーナを並べて、短い方を“短(みじ)ケーナ”長いほうを“でっケーナ”などと遊び心を交えての紹介に会場もリラックス。演奏に使ったのは「G管」と紹介されていました。

第2部は、二人ともグリーン、赤、オレンジ、青など綺麗な原色の花柄の民族衣装で登場。(写真はチラシより転写)演奏曲は「アヴェ・マリア(ピエトロ・マスカーニ作曲)」、「アメイジング・



グレイス」、「映画『ミッション』～ガブリエルのオーボエ」(※1986年の英国映画で、1750年頃のパラグアイを舞台にしている。スペイン統治下のパナラ川

流域で布教に励むガブリエル神父は自らオーボエを演奏し、音楽を共通語として先住民グアラニー族と融和を図る。)の賛美歌を3曲。

続いて南米の音楽を集め、まず「牛乳列車」(※パラグアイで毎朝村から町まで牛乳を積んで運ぶ汽車が走る様子が描かれている。アルパの37本の弦を余す所なく駆使し、走り出す様子など、音だけでなく手の動きまでもが汽車のようであることにもご注目いただきたい)この曲では、両手の平に入るくらいのも木製の電車に空の牛乳瓶を3個載せカチャカチャさせたり、手製のマラカスで“シュシュポツポ”を入れたり、聴いていても観ても楽しい演奏でした。続いて「シェリート・リンド」、「コーヒー・ルンバ」、「ラ・ゴロンドリーナ(つばめ)」、「コンドルは飛んで行く」を演奏。アルパの奏でるベースの音が印象的です。

全体を通しての感想は、殆どの曲に歌詞があり、アルパ奏者の歌声が素晴らしい。伸びがあり、澄んでいるだけでなくとても柔らかい声に癒されます。ケーナもボーカルに合わせて息継ぎや歌いだしのところどりがった音にならないように音の立ち上がりがに気をつけていますとコメントがあり、風が吹き渡るような柔らかい音色は、人間の声に似た音域があって、アルパとメゾソプラノの歌声にケーナの音と風の織りなすアンサンブルは見事でした。あの優しい音の繋がりにはアコーディオンの音づくりに通じると感じました。(乙津：記)

サイン会終了後、ケーナ奏者の八木倫明氏にコンサート情報に関東アコニュースで紹介しても良いか伺った所、快く承諾して頂きました。さらに、申し込む際に、電話の場合はオペレーターに「関東アコニュースを見てチケットを申し込んでいます」と言えば、一般券を1,000円引きにしてくださいとのこと。詳しくはホワイトボードを参照。

